

中務集注釈(七)

古今集歌人伊勢の娘、中務の家集を取り上げ、注釈を試みる。本紀要五八号「中務集注釈(二)」以来、前号、六三号「中務集注釈(六)」に至る六回の論考において、中務集二類本、冷泉家時雨亭文庫蔵資経本二九八首の注釈の試みを終了した。本号と次号の予定で、資経本に収載されず、一類本、西本願寺蔵三十六人集に存在する歌の注釈を行う。なお、歌番号は西本願寺本の通し番号である。

「中務集注釈(一)〜(六)」について、ご教示を賜った皆様に深く感謝申し上げます。

各歌の文責を次に示す。一九・七四・七七(加藤)、一三四〜一三五・一五三〜一五五(斎藤)、一三六〜一三八・一五六〜一五九(高野瀬)、一三九〜一四一(森田)、一四二〜一四四・一七三〜一七四・一八二〜一八五(曾和)、一四五〜一四六・一五〇〜一五二・一八六・一九八〜一九九(谷崎)。

高野晴代・高野瀬恵子・加藤裕子
森田直美・斎藤由紀子・曾和由記子
谷崎たまき

凡例

- 一 本注釈は、西本願寺蔵三十六人集本を底本とする。
- 二 本文の校合に用いた本は、以下の通り(一)内は、異同を掲出する際の略称)。
前田家旧蔵 現出光美術館蔵 伝西行筆本(前)
奈良女子大学蔵歌仙家集本(歌)
- 三 和歌本文は読解の便のため、適宜仮名を漢字に、漢字を仮名に改めた。また、詞書内には必要に応じて句読点を施している。校訂した箇所や仮名漢字表記を改めた箇所は、右にルビで底本での表記を示した。
- 四 底本を校合本によって校訂した箇所は、「語釈」もしくは、「補説」に、その理由と共に明記した。
- 五 本注釈に類出する先行研究論文は、以下の略称を用いる。

① 稲賀敬二氏『女流歌人 中務―歌で伝記を辿る―』（新典社

平・二一）↓『女流歌人中務』

② 木船重昭氏『中務集相如集注釈』（大学堂書店 平・四）↓木船注釈

一九番歌

岸きしに藤ふぢ咲さける

川岸かわぎしに生おひたる松まつに藤波ふぢなみのかかれど年としの尽つきぬなりけり

〔異同〕 さける↓か、れり（歌） さけり（前）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○藤波のかかれど 「藤波」は、藤の花が風になびく様を波に見立てた表現。「かかる」は、藤が松に咲きかかる意に、「藤波」の縁で波がかかる意をも匂わせる。「岸近き松にかかれる藤波は春の名残にたちとまらなむ」（資経本中務・七〇）。○年のつきぬなりけり 「年」は、齢の意。「落ちたぎつ滝の水上年積もり老いにけらしな黒き筋なし」（古今・雑上・九二八 忠岑）。「つきぬなりけり」は、波はかかると尽きるものだが、いくら藤波がかかっても千年という松の齢が尽きることはないと意。「うちわたし岸辺は波にくづるともわが名はつきじ天の橋立」（好忠・一八六）。

〔通釈〕 岸に藤が咲いている

川岸かわぎしに生おえている松まつに藤波ふぢなみがかかっている、波なみとはかかると尽つきてゆくものだが、千年という松の齢が尽つきることはないのであった。

〔補説〕 「村上の先帝の御屏風に」という詞書のもとに収められた屏風

歌。松にかかる藤は当時の屏風歌に多く見られる類型的な構図。片桐洋一氏「松にかかれる藤波の」（『文学・語学』昭三六・『古今和歌集の研究』平三）が指摘するように、はかなく散る藤の花も常緑の松にかかることよって永遠性が保証されることになり、松にかかる藤はめでたい景となる。「散りぬとてあたにしも見じ藤の花行く先遠く松に咲ければ」（貫之・二二五）、「松風の吹かむ限りはうちへてたゆべくもあらず咲ける藤波」（同・一九一）。当該歌も、波はかかれれば次第に尽きてゆくものだが、松の千年の齢は尽つきることがない、松の齢が尽つきない限り藤も永遠に咲き続けると詠んで慶賀の意を表したものと見られる。

七四番歌

沢水さほろにかげのかたぶく山吹あまぎはかはづこゑの声をあはれとや聞きく

〔異同〕 さほみつ↓神水（歌）、あをやき↓山ふき（前・歌）、かはへ↓かはづ（前・歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○沢水 「沢」は、水草などが繁っている湿地、または溪流。「沢水にかはづ鳴くなり山吹のうつろふ影や底に見ゆらむ」（拾遺・春・七一 よみ人しらず）。○かげのかたぶく 「かげ」は水に映る姿。「かたぶく」は、横に傾く、傾斜する意。「武隈の松も一もと枯れにけり風にかたぶく声のさびしさ」（重之・一九九）。ここは、沢水に映る影が斜めに傾いている様をいう。それをかわずの声に耳を傾けている様とらえている。○山吹 木船注釈は、底本に従い「あをやぎ」で解釈しているが、「沢水」「かはづ」との関係がより深いことから他本によって「山

吹」と改めた。○かはづの声 底本「かはへ」とあるが、「へ」は「つ」の誤写と見て他本によって改めた。「かはづ」は、普通の蛙の異称とも、谷川の清流に住み夏から秋にかけて澄んだ声で鳴くカジカを指すともいうが実体ははっきりしない。山吹とともに詠まれることが多い。「補説」参照。○あはれとや聞く「あはれ」は、感嘆や賞美の情を表す。「あづま路の野路の雪間をわけて来てあはれ都の花を見るかな」（拾遺・雑春・一〇四九 長能）。ここは、かわずの澄んだ美しい声に感じ入っている。

〔通釈〕

沢辺の水に映る姿が傾いている山吹は、かわずの声を「ああ美しい」と聞いているのだろうか。

〔補説〕 当該歌は、西本願寺本では六八番歌の詞書「坊城の右のおほいどの、五十賀中宮したまふ、村上の先帝のめしたる」のもとに収められており、藤原師輔五十賀の屏風の料として詠まれた歌と見られる。「中務集注釈（二）」（『日本女子大学紀要 文学部』五九号、平二二）八五番歌「語釈」参照。山吹とかわずという当時の類型的な取り合わせに則って沢水に影を映して咲く山吹を詠む。「沢水にかはづ鳴くなり山吹のうつろふ影や底に見ゆらむ」（拾遺・春・七一 よみ人しらす）「山吹の花影見ゆる沢水に今ぞかはづの声聞こゆる」（古今六帖・第三・かはづ・一五九九）などは当該歌と類似した表現を備えているが、山吹が斜めに傾いて水に影を映している様をかわずの声に耳を傾けているようにとらえた点が工夫といえる。

七七番歌

片岡かたがの御垣みがきの原はらの鶯うぐいすは花散りぬとや音ねをば鳴くらむ

〔異同〕 なし（前田家本↓歌ナシ）

〔他出〕 夫木抄・雑四・九九四八（読人不知）

〔語釈〕 ○片岡 片側一方が、なだらかに傾斜している丘の意の普通名詞か。「片岡にわらびもえずはたづねつつ心やりにや若菜つままし」（『大和物語』八六段）。大和国の歌枕である「御垣の原」との連続から「霧立ちて雁ぞなくなる片岡の朝の原は紅葉しぬらむ」（古今・秋下・二五二 よみ人知らず）と詠まれた大和国の片岡（奈良県香芝市付近）とも考えられる。○御垣の原 大和国の歌枕。奈良県吉野郡吉野離宮の垣あたりの原という。「ふるさとは春めきにけり吉野山御垣の原を霞こめたり」（兼盛・九〇）。○音をば鳴くらむ 声を上げてなく。「住の江の松にたち寄る白波のかかる折りにや音をばなくらむ」（忠岑冷泉家伝為家筆本・四六）。

〔通釈〕

片岡の御垣の原の鶯は、「花は散ってしまった」と声をあげて鳴いているのだろうか。

〔補説〕 七四番歌と同じく坊城右大臣五十の賀の屏風歌の一首。落花を惜しんで鳴く鶯を詠む。「花の散ることやわびしき春霞たつたの山の鶯の声」（古今・春下・一〇八 藤原俊蔭）、「しるしなき音をも鳴くかな鶯の今年のみ散る花ならなくに」（同・一一〇 躬恒）、「春ながら年は暮れなむ散る花を惜しと鳴くなる鶯の声」（寛平御時后宮歌合）など、同じ発想の歌は多い。当該歌は、鶯の声を聞いて「花散りぬ」と鳴いて

いると想像したのか。

一三四・一三五番歌

人通はしたる、男あり

恋ひわたる君を見しにはあらねばや思ひ病まれて今日は恋しき

返し

逢ひ見ての後さへもの悲しくは慰め難くなりぬべきかな

〔異同〕 人かよはし、たるをとこあり↓人かよはしたるをとこ（前）、
けふは↓けふも（前）

〔他出〕 清慎公七六（中務）・七七（実頼）、続後撰・恋三・八三八（一
三五のみ・中務）、秋風・恋中・七九五（一三五のみ・実頼）

〔語釈〕 ○人通はしたる、男あり 「人通はし」という名詞の用例は見
出し難く、前田家本によりおどり字は衍字と推測した。「通はず」には、
「女が、男の通つて来るのを受け入れる」という意味の用法がある。男
は藤原実頼。詠者については「補説」参照。○君を見しにはあらねばや
「や」は反語と解釈した。「補説」参照。○思ひ病まれて 恋しさのあま
り病気になるほど深く悩む。「さにつらふ 君がみ言と 玉梓の 使ひ
も来ねば 思ひ病む 我が身ひとつそ…」（後略）（万葉・卷十六・三八
一一 作者不明）。ただし、平安期には「つらきをばしひてぞしらぬそ
糸にとておもひやむべきころならねば」（能宣・八）のように「恋心
を諦める」意の「思ひ止む」の例がほとんどである。○今日は恋しき
あえて「今日は」と断わることで、逢えなかった日々より逢えた今日一

際恋しさがつのることを訴える。

〔通釈〕 人を通わせる頃、男から

ずっと恋してきたあなたにお会いしたのではないからでしょうか、
いえお会いしたはずなのに、そのことに一層思い乱されて、今日は
あなたが恋しく思われます。

返し

逢瀬の後でさえ悲しいならば、私にはあなたをお慰めするのは難し
いことですね。

〔補説〕 一三四番歌は『清慎公集』で「大臣おはして帰りたまへるに中
務」という詞書がつけられており中務詠。片桐洋一氏他『小野宮殿実頼
集・九条殿師輔集全釈』（風間書房・平一四）では実頼の歌に中務が返
したと考える方が自然とし、「中務に」の「に」がある本と、脱落した
本があったのではないかと推測する。『女流歌人中務』では打ち解ける
ことなく別れた後朝の歌と解し、「第三者の目に触れる危険を考えて、
恋の贈答では、逢つても逢わぬ嘆きの歌を詠んで偽装工作をやる例」と
している。「少しだに言ふは言ふにもあらねばや言ふにもあかぬこち
のみする（一条摂政・一一三）」と詠まれるような心情か。それに従う
と返歌は「実際にはお逢いしたのに逢つてないことにするなんて、甲斐
のないこと」という切り返しとして解される。しかし、「今日」は逢瀬
の後日を指すことが明確であり、「や」を反語ととることで、「逢ひ見て
はなぐさむやとぞ思ひしをなごりしもこそ恋しかりけれ（是則・三八）」
のように逢つて益々恋心がつり慰められないことを訴える恋歌と同様
に解した。

山里に通ふ人あるやうに聞きて

千早振る三輪の山もと経にければ恋しき人もあらじとぞ思ふ

返事

音にのみありとは聞けど三輪の山杉の生ひたるかただにも見ず

〔異同〕 なし（西本願寺本のみの所収歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○山里に通ふ人あるやうに聞きて 「人」は誰か、「通ふ」「聞きて」の主語は誰か等、不明瞭な点が多い。「山里に通う人（男）」がいて、私が聞いて」とも、「山里に、通う人（相手の女）」がいて、私が聞いて」とも、あるいは「私がある山里に通う人がいると、男が聞いて」と等と考えられる。又、この贈答のどちらが中務の歌なのかも詞書だけでは判然としないが、ここは、「聞きて」の主語と一三六番歌の作者を中務と考えておく。「補説」参照。○千早振る 枕詞。多く「神」を導くが、「宇治」「賀茂」「平野」「浅間の岳」等、地名や神名を導く例も見られる。ここは「三輪の山」を導く。○三輪の山もと この贈答は「わが庵は三輪の山もと恋ひしくはとぶらひきませ杉たてる門」（古今・雑下・九八二 よみ人しらず）を踏まえている。「補説」参照。○経にければ「経（ふ）」は、和歌では月日や時間を過ぐす意がもつぱらである。「おき明かす露の夜な夜な経にければまだき寝るとも思はざりけり」（後撰・秋中・二八三 よみ人しらず）。ただし、当該歌では月日などの言葉が明示されておらず、通過するの意とも考えられるか。○恋ひしき

人もあらじとぞ思ふ 「三輪の山いかにまち見む年経ともたづぬる人もあらじと思へば」（古今・恋五・七八〇 伊勢）を踏まえた表現か。〔補説〕参照。○杉の生ひたるかた 目印の杉の生えている所、の意。

〔通釈〕 山里に、男が通う人がいるように、聞いて

あなたはもう三輪山の麓を過ぎてしまったので、恋しい人も私ではあるまいと思いますよ。

返事

話にはあると聞いていますが、三輪の山は、目印の杉が生えている所さえも見ないことです（私が通う所などありませんよ）。

〔補説〕 この贈答は『古今集』九八二番歌を背景にしているだけでなく、答歌のほうは、次の『後撰集』歌と表現が類似している。

女のもとにつかはしける

音にのみ聞きこし三輪の山よりも杉の数をば我ぞ見えにし

（恋二・六二四 よみ人しらず）

この『後撰集』の歌は、「古歌にいう三輪山の杉よりも、私はあなたの家の杉を数多く見てしまった、数も知れないほどあなたを訪ねていることだ」と相手に訴えている。当該贈答の答歌では「杉の生えている所さえも見ていない」と言っている。内容としては正反対の主旨である。こうした点から、贈答は、自分の恋人が山里に住む女のもとに通うという噂を中務が耳にして、その男を非難したもので、答歌が、浮気の噂を否定する男の返事と考える。仮に状況はそうであったとしても、答歌は理解できるものの、贈答が分かりにくい。「三輪の山もと経にければ」は、中務自身か、または相手の男が山里に住む別の女に通うことを言うのか。「恋ひしき人もあらじとぞ思ふ」は、伊勢の歌を踏まえているならば、あなたが私のもとを訪れることもないでしょうよ、と言ったものか。

一三八番歌

人の、久しく訪れぬに、正月一日

いつでもや霜がれしかど我が宿の梅を忘れぬ春は来にけり

〔異同〕 いつそもや↓いつそやも（前）

〔他出〕 師輔・一九、一条撰政・一七九、新勅撰・春上・三三二（藤原師輔）

〔語釈〕 ○人 藤原師輔か。〔補説〕参照。○いつでもや いつのことであつたかなあ、の意。「いつでもや」の形での用例は当該歌のみ。「夜半にのみ鳴くほととぎすおほつかなあやめみるべき今日はいつでも」（忠見・四三三）。前田家本と『師輔集』では「いつそやも」とするが、働きは同じ。○霜がれ 草木などが霜のためにしほみ枯れること。その荒涼とした眺め。梅などの枝が何も無い状態であることを表現する例もある。「霜がれの枝となわびそ白雪のきえぬ限りは花とこそみれ」（後撰・冬・四七六 よみ人しらず）。ここは「かれ」に「枯れ」と「離れ」を掛ける。

〔通釈〕 恋人が久しく訪れない頃に、正月一日

いつのことだったかしら、霜枯れしてしまつたけれども、この家の梅を忘れない春はやって来て花が咲いたことです。いつからか、あなたは来なくなつてしまつたけれど、訪れてほしいものです。

〔補説〕 当該歌は、他出が三首あり、他出①『師輔集』によれば、中務と師輔との贈答の贈歌であり、他出②『一条撰政御集』では、ある女と伊尹との贈答の贈歌である。また、他出③は、やや異同があるが、師輔が中務に贈つた歌ということになる。

当該歌は他出①②によれば贈歌であるが、前田家本『中務集』では一見答歌のように見える。

人かよはしたる男

恋ひ渡る君を見しにはあらねばや思ひやまれて今日も恋ひしき

かへし

いつそやも霜がれしかどわが宿の梅を忘れぬ春はきにけり

（前田家本『中務集』一三三三～四）

しかし、これでは贈答歌として考えにくいので、前田家本の書写段階での歌の脱落等が考えられる。また、西本願寺本『中務集』には、中務が贈つた歌と解釈できる詞書が存在することから見て、師輔歌とする他出③は信頼性において劣る。当該歌が誰に贈られた歌かを考えるために、他出①と②とを検討してみると、①の贈答は『師輔集』では集の初めのほうにあるのに対し、②の『一条撰政御集』では集の終わりに近い所にあり、しかも歌の並び方には不審な点もある。即ち、

たれにか、おとど

人しれぬ身とし思へば暁の鳥とともにぞ音はなかけける

また、女

いつでもや霜がれしかどわが宿の梅を忘れぬ春はきにけり

返し、おとど

忘れぬはるはるごとに梅の花ねをとどめてし人を偲べよ

おなじ人に、とだえたまで

姨捨の山の月かげ見し夜よりまたなぐさまぬこちこそすれ

（一条撰政・一七八～一八一）

とあるのだが、これでは、一七九番詞書「また、女」の「また」は直前を受ける形にはならない。また、一八一番詞書「おなじ人」は一七九番

の「女」とも読めるが、一七八番に直結してみると、それでも意味が通るように思われる。このことは、『一条撰政御集』では、一七九・一八〇番歌が、「人しれぬ」の歌と「姨捨の」の歌との間に割り込んだ形になったことを疑わせる。従って、西本願寺本『中務集』一三八番歌を解釈する場合、他出①『師輔集』と組み合わせる考えるのが妥当ではないだろうか。すなわち一三八番歌は中務の詠作であり、その詞書の「人」は師輔を指すのであり、師輔の家集においては返歌と共に記録されたのだと考えるべきであろう。

一三九・一四〇番歌

人 松と梅とをとりませ

さだめなく徒なるものを見るよりは常盤に散らぬ松をやは見ぬ

返し

住の江のわが身なりせば年経とも松よりほかの色を見ましや

〔異同〕 またひとに↓ひとまつとむめとをとりませ(前)、ものを↓はなを(前)、色をやは見ぬ↓まつをやはみぬ(前)

〔他出〕 後撰・恋一・五九六・五九七、五代集歌枕・九四九

〔語釈〕 ○贈歌詞書 底本「またひとに」だが、歌の内容から、贈歌が男、答歌が女の歌であるのが穏当と考えられる。よって、前田家本により校訂した。○徒 一時的でかりそめなもの。ここでは、ほどなく移ろう梅の花にことよせ、頼みにできない相手の恋心をいう。○常磐 「徒」との対比。「花」と「松」に関する類例は「補説」を参照のこと。○散

らぬ松 底本「散らぬ色」だが、女性に対して「変わらず待っていてほしいものだ」と詠みかけた方が、答歌との内容的な緊密さが増す。よって前田家本により校訂した。○住の江のわが身 他出『後撰集』の初句は「住吉」。この場合、「住みよし」との掛詞。底本「住の江」だが、「住吉の海辺」を意識したものと考え、通釈には「住みよし」、すなわち相手に対して、「私とあなたの関係が良好に続けば」の意を反映した。○松よりほかの色を見ましや 「松」は「待つ」との掛詞。「あなたが私を不安にさせなければ、あなたを待たないはずがありませんか」と、相手に末永い誠実を求めたと解した。

〔通釈〕 人が、松と梅とをとりませでよこした際に

不確かで儚いあなたのお心を見るのではなく、とこしえに気持ちが変わらず、私を待っていてくれるあなたを見続けられましょうね。

返し

あなたが私を不安にさせず、心安い仲であり続けられたならば、年月を経ても、とこしえにあなたを待っておりましょうよ。

〔補説〕 底本贈歌と同様に「はかなく散る花」と「常磐の松」とを対照的に詠み込む例が、貫之、躬恒の集に見える(ただし、花は梅ではなく桜(躬恒集)と藤(貫之集))。

常磐なる松をばおきてあぢきなく徒なる山の桜をぞ見る

(躬恒・八九「春」)

松に咲ける藤の花

藤の花徒に散りなば常磐なる松にたぐへるかひやなからん

(貫之・二二四)

しかし、貫之や躬恒の歌が叙景歌であるのに対し、当該贈答は、これを恋愛ごとによそえている点がひとつの特徴と言えよう。

一四一番歌

「雨ふる」とて、待つ人の来ねば

ふるによりさはる心もうきものを雨のみつらく思ほえしかな

〔異同〕 まつひとの↓人の（前）、思ほえしかな↓思ほえぬかな（前）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○ふるにより「降る」は「経る」との掛詞。時が経過し、雨が降ると訪問が億劫になるほど相手の愛情が衰えてしまったことを嘆く。雨が原因で男性が訪れなかったことを恨んだ同趣の歌として、「人ならば言ふべきものをまつほどに雨ふるとではさはるものかは」（和泉続・四二六）などが挙げられる。

〔通釈〕 「雨が降っている」といって、待っていた人が来ないので、時が経つにつれ、訪問が億劫になるあなたのお心もやりきれませんのに、更に障りとなる雨ばかりが恨めしく思われることです。

一四二・一四三・一四四番歌

梅につけて、人に

見ぬほどにうつろひぬらむ梅の花深かりきともちのちに語らむ

返し

鶯の宿の花だに色濃くは風にも当ててしばし待たなむ

又・

当てじとて守れど風の吹き来つつあるにもまさる香をいかにせむ

〔異同〕 返し↓こうはひにつけて（前）、かせにあて、を↓かせにもあて、（前）、詞書ナシ↓又（前）、ふき、つ、↓ふきつ、も（前）

〔他出〕 新千載・春上・五五（一四二）・五六（一四三）清慎公

〔語釈〕 ○梅 花の色濃さを詠む歌の内容から紅梅。○見ぬほどに 梅を見ないうちに。訪れがないために相手の家の梅を見ていない意。

「桜花まだ見ぬほどに散りにけりのちの春だに心あらなん」（義孝・六四）。○深かりきとも 「色が濃く美しかった」とも、の意。当該歌のように形容詞+過去の助動詞「き」の終止形に格助詞「と」が続く引用の形で詠まれる例は多くは見出せない。「津の国のみつとしみては難波なるあしかりきとも人に語るな」（古今六帖・第五・二九七六 賀茂女王）。○鶯の宿 『大鏡』などに見える鶯宿梅の故事の紅梅を意識した表現か。○風にも当てて 底本は「かせにあて、を」である。「を」を間投助詞として解釈できなくもないが、ここでは前田家本によって「風にもあてて」と本文を校訂した。○又 底本では詞書はなく、前歌と続けて一四二番歌の返歌が二首並ぶように見えるが、内容から一四四番は一四三番の返歌。本来は「又」などの詞書があったものが脱落したと考えられるので、前田家本によって補い本文を校訂した。○あるにもまさる香 今までも増して香る意。風が吹いて、今までもよりもさらに香りが立ち、待っているうちに盛りを過ぎてしまうことをいう。

〔通釈〕 梅につけて、人に送った歌

梅の花は、あなたがご覧にならないうちにきつと散ってしまうでしょう。う。「色濃く美しかった」とも後にお会いした時に語りましょう。

返し

又・

返し

鶯の住む宿の花だけでも色が濃いならば、散らさないように風にも
当てないで、しばらく待ってほしいものです。

又

当てまいと守るけれど、風が繰り返して吹いてきて、今までにも増し
て漂っていく花の香りを、どうにもしがたいことです。

〔補説〕 一四二・一四三番歌は『新千載集』に清慎公との贈答として入
集する。しかし『清慎公集』には収載されていない。底本一三四・一三
五番に清慎公との贈答歌が並ぶため、『新千載集』が底本を資料に贈答
相手を清慎公とした可能性もあることは木船注釈も指摘しているが、清
慎公と断定はできない。

一四五・一四六番歌

〔補説〕 通釈では一四六番歌の「色」を中務の容色としているが、色あ
せる花の色に男の心変わりを重ねた表現として解釈することもできる。
その場合、通釈は「散り際の花のような私は、昔に比べてひどくあなた
の愛情がうつろったものだ」と見ております」となる。類似表現に「花の
木も今は掘り植ゑじ春たてば移ろふ色に人ならひけり」(古今・春下・
九二 素性)がある。

うつろはぬ花のあたりを訪ねつつ、庵れる虫をあはれとぞ思ふ
返し

散り方の花のあたりはいとどしく昔うつろふ色とこそ見れ

〔異同〕 ひと↓ナシ(前)、いをれる↓いひれる(前)、おもふ↓(前)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○移ろはぬ花 花が何の花を指すかは特定できない。咲いてい
る花を中務の変わらぬ美しさにたとえる。○庵れる虫 糞のような巢を
作る糞虫の特性から、「仮小屋に住む」と表現する。糞虫が花の近くに
宿っていることを、慕う人(中務)の家の近くに宿ることと重ね合わせ

て羨んでいる。○いとどしく昔移ろふ色 かつての花盛りから甚だしく
衰えて色あせる花の色に、衰えていく中務自身の容色を重ねる。「花の
色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」(古
今・春下・五九 小町)。

〔通釈〕 糞虫がついている枝につけて、人が

移ろわずに咲いている花のようなあなたを繰り返して訪れております
と、仮小屋を作って宿っている虫を慕わしく思うことです。

返事

散り際の花のような私は、昔の花盛りから甚だしく容色が衰えてし
まったと、見ることですよ。

〔補説〕 通釈では一四六番歌の「色」を中務の容色としているが、色あ
せる花の色に男の心変わりを重ねた表現として解釈することもできる。
その場合、通釈は「散り際の花のような私は、昔に比べてひどくあなた
の愛情がうつろったものだ」と見ております」となる。類似表現に「花の
木も今は掘り植ゑじ春たてば移ろふ色に人ならひけり」(古今・春下・
九二 素性)がある。

一五〇番歌

知りたりける人の、早う行きける所に又行きたりけるに

見る人の袖をあやなく濡らすかな野中の水の深きばかりに

〔異同〕 知りたりける人の↓しりたる人(歌) しりたりけるをとこの
(前)、いきける所に↓いきしところ(歌)、いきたりけるに↓いきけ
るに(歌・前)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○詞書 親しくしていた男が、以前通っていた女性の元へ再び通い出した際の恨みの歌と考えられる。○見る人の袖をあやなく濡らすかな 見る人は中務自身。水を汲みもしないのに、見るだけで涙によって袖を濡らしていることを表す。○野中の水の深きばかりに 野中の水は播磨の国の歌枕。現在の神戸市西区岩岡町付近にあったとされる湧水。「いにしへの野中の清水ぬるけれど本の心を知る人ぞくむ」（古今・雑上・八八七 よみ人しらず）に拠り、野中の水をかつて通っていた女性にたとえ、男の昔の恋人への愛情が再び深まることを嘆く表現。

〔通釈〕 親しくしていた人が、以前通っていた女性のもとにまた通ったので

見ているだけの私の袖をむやみに濡らすことですよ。昔お通いになった方へのあなたの愛情があまりに深いので。

〔補説〕 ほぼ同時代の例に「元の妻にかへり住むと聞きて、男のもとにつかはしける／我がためはいとど浅くやなりぬらん野中の清水深きまされば」（後撰・恋三・七八四 よみ人しらず）がある。野中の水を「元の妻」として、男が昔の恋人とよりを戻したこと嘆いており、当該歌と同趣の歌である。

一五一・一五二番歌

蛙かへるのかれたるをおこせて、人

かれにけるかはづこゑの声を春立ちたてなどか鳴かぬおもと思ひけるかな

返し

誰たれかかく殻からをおきては惚しほぶらむよみがへるてふ名をや頼たのみし

〔異同〕 かへるのかれたるを↓かれたるかはづを（前）、おこせて人おかせて人の（前）人のおこせて（歌）、などかなかぬと↓などかあかぬと（前）、からをおきては↓こゑをなきては（前）、しのふらむ↓しのひけむ（歌・前）、よみかへるてふ↓よるかへりては（前）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○かれにけるかはづ 死んで干乾びた蛙。「乾れ」に蛙の声が「嘎れ」る意を掛ける。和歌に用いられる例は見出しがたい。○殻 蛙の死骸。○春立ちてなどか鳴かぬと思ひけるかな 久しく音信が途絶えている中務を、春になつても鳴くことのない蛙に喩えた表現。○よみがへる 「よみがへる」に蛙の意を掛ける。「葦引きの山田のそぼううちわびて一人かへるの音をぞなきぬる」（後撰・恋四・八〇六 よみ人しらず）。

〔通釈〕 蛙の干乾びたのをよこして、人が

干乾びて、鳴かなくなつた蛙の声を、立春になつたのにどうして鳴かないのか、と思つたことですよ。

返事

いったい誰がこのように干乾びた蛙の亡骸を置いて鳴き声を懐かしんでいるのでしょうか。「よみがえる」という名を頼りにしたのでしようか。

〔補説〕 干乾びた蛙に和歌を添えて贈る例は見出しがたい。『袋草紙』には藤原節信と能因が「長柄の橋を造りける時の匏厨」と「井手の蛙」の干乾びた死体という珍品を見せ合うという逸話がある。当該贈歌も、春の訪れを機会に、ユーモアを込めた挨拶として珍品を添えて贈られた

ものと解釈した。

一五三・一五四番歌

はや住みし家の桜を箱に入れて、人

年を経てをりける人も訪はなくに春を過ぎぬ花を見よ君

返し

明け暮れに訪はぬばかりをたまくしげそなる花はいつか忘るる

〔異同〕 はやうすみしいへのさくらはここにいれて↓はやうすみし家のさくらを(歌) はやうすみしいへのさくらをこはここにいれて(前)、をりける↓すみけん(歌)、とはぬはかりを↓とはぬはかりそ(歌)、そなる↓そなる(歌)、花の↓花は(歌・前)

〔他出〕 新拾遺・春下・一三二(一五三)

〔語釈〕 ○はや住みし家 以前住んでいた家。○人 今の住人か。○過ぎぬ 咲くべき時を忘れない。○明け暮れ 始終。贈られた「箱」に應じて「開け」と掛ける。○たまくしげ 箱の美称。万葉以来「あく(開く・明く)」や「覆う」に掛かる枕詞として用いられた。「なれにけるほどをわたするなたまくしげあけくれとはぬをりはありとも」(時明・二二)等。○そなる花は 底本の「空なる花」では雪を指すことになり歌意がとりにくい。歌仙本により「そこ」校訂した。箱の「底」と旧宅を指した「そこ」を掛ける。「冬の池にすむには鳥のつれもなくそこにかよふと人にしらすな」(古今・恋三・六六二 躬恒)。また、歌仙本・前田本により「花の」は「花は」と校訂した。

〔通釈〕 以前住んでいた家の桜を箱に入れて、人が

年月が経って手折った人も訪れないのに、春を忘れず咲いている花を御覧ください。

返し

始終訪れないというだけですのに。そこにある桜はいつだって忘れていませんよ。

一五五番歌

桜の又生えしたる枝のあかきにつけて

春過ぎて秋はまだ来ぬ程なれば花か紅葉かえこそ定めぬ

〔異同〕 さくらははえたるえたのあかきにつけて↓さくらの又はへしたるえたにつけて(歌) さくらの又ははえたるえたのあかきえたにつけて(前)、さだめぬ↓見わかぬ(歌・前)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○又生えしたる枝のあかきにつけて 「はえたる」を、他本により「又生えしたる」と校訂。「又生え」は草木の切株から芽生えたひこばえ。その葉や枝が赤味がかつた色をしていることがあり、「佐保山の奈良のかしは木又ばえのもとつはしげみもみぢしにけり」(夫木・楯・一三九九一 信実)などと詠まれている。季節外れに色づく又生えの葉にことよせて「春秋・花紅葉」の対表現をなしている。

〔通釈〕 桜の又生えした枝で赤く色づいているのにつけて 春が過ぎて秋はまだこない間のことなので私にはこれが花か紅葉か見定めることができません。

また人ひと

逢ふと見し夢を頼みて春の日の暮れがたきをも眺めつるかな

返事

心してあらましもを夢にてもいかに面なく見えわたるらん

〔異同〕 はるのよの↓はるのひの（歌、前）、なかめ↓なけき（前）、ゆめにても↓ゆめとても（歌）、あらまし↓あはまし（前）、みえわたるらん↓みえわたりけん（歌・前）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○逢ふと見し夢を頼みて 夢の中であなたと逢ったと見えた、その夢を頼みとして。「うたた寝に恋ひしき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき」（古今・恋二・五五三 小町）を踏まえた表現。○春の日の暮れがたきをも 春の昼がなかなか暮れず長く感じられる、その暮れを待つ時間をも。底本「よ」を、他本により校訂。「夜」では「暮れがたき」と論理的整合性がとれない。春の日が長いとする歌は『古今集』時代から見える。○心してあらましもを 心配りしていただろうものを。贈歌の「逢ふと見し夢」をうけて、自分が相手の夢に見えたことについて言ったものと思われる。○いかに面なく見えわたるらん 「面なし」は、①人に会わせる顔がない、恥ずかしい、②恥知らずだ、あつかましい、の意。「面なし」の和歌における用例は極めて少なく、当該歌の他には、中世・近世の例のみである。「恥身恋／思ふとおもなくいかで見えもせん鏡にだにもつつまましき身を」（雪玉集・三五三

四）。ここは、どうして恥ずかしくもあなたの夢に見られ続けてしまったのか、の意か。「面なれ」等の誤写も考えられなくはないが、底本どおりとした。

〔通釈〕 また人が

あなたと逢えたと見た夢を頼みとして、春の日の暮れがたい時間も物思いにふけて過ごしてしまったことです。

返事

夢の中でもあなたに会わないように注意しているものを、どうして恥ずかしくも夢で見られ続けてしまったのかしら。

〔補説〕 『後撰集』に、一五六番歌とよく似た歌がある。

人のもとにつかはしける

藤原安国

あふと見し夢にならひて夏の日のくれがたきをも嘆きつるかな

（夏・一七三）

「現実には未だ逢えないでいるものの、夢の中では逢っている、その夢に慣れてしまつて、夏の日のなかなか暮れないのを嘆いている」との趣旨の歌。作者の藤原安国は従五位下右衛門権佐で、延長元（九二三）年没との説もある人物。『女流歌人中務』は、一五六番歌と『後撰集』歌とを同一歌と見て、次の一五八・一五九番歌とともに、中務の若い日の安国との贈答歌である可能性を述べるが、一方で安国が延長元年没ならば、中務の推定年齢（この頃十歳ころ）からみて、安国の相手を中務とするのは疑わしくなるとも指摘する。確かに一五六番歌と『後撰集』歌はよく似ているが、同一歌と見なすには、異同が気になる。おそらくどちらかの歌が先行して、その歌を残る片方が利用した、という関係の類歌ではないか。

一五八・一五九番歌

また人

頼めどもむなしき空をながめつつ忍びに袖の濡れぬ日ぞなき

返事

あはれとも思ふ心の空なるはながむと人を聞けばなりけり

〔異同〕 そらなるは↓そらなるに（歌）、人を↓人も（歌）

〔語釈〕 ○むなしき空 逢瀬を期待してもむなしき空、の意。「わが恋はむなしき空にみちぬらし思ひやれどもゆく方もなし」（古今・恋一・四八八 よみ人しらず）、「大空は恋しき人のかたみかは物思ふごとに眺めらるらん」（古今・恋四・七四三 酒井人真）等の歌を背景にした表現と思われる。

〔通釈〕 また人から

期待しても空しい空を眺め眺めしては、あなたを恋しく思って人知れず袖が濡れない日はないのです。

返事

あなたが私を愛しいと思う心が、結局はうわの空で真実がないのは、あなたが空を見て物思いしていると聞いてわかりましたよ。

一七三・一七四番歌

来たれば、返したれば、また人

秋風になびく心は葛の葉の吹きかへさるるをりぞわびしき

返事

心より吹くにもあらぬ秋風にかへる木の葉のうらみざらなん

〔異同〕 きたれば↓きたるに（前・歌）、又ひと↓人（前）またきて（歌）、くすのはに↓くすのはの（前・歌）返事↓かへし（前・歌）、秋風は↓あきかせに（前・歌）このはの↓このはを（前）くすのはの（歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○秋風になびく心 人に心を寄せる比喩。「女郎花あきの野風にうちなびき心ひとつをたれに寄すらむ」（古今・秋上・二三〇時平）。○葛の葉の吹きかへさるる 底本は「くすのはに」。他本に拠って「葛の葉の」と校訂した。「葛」は風に翻って白い裏葉が印象的などころから、「裏」「うらみ」にかけて詠まれることが多く、恋の怨情の比喩として用いられる。当該歌の「吹きかへさるる」は、葛の葉が裏返る意と、男が追い帰される意の掛詞。また、葛の葉が返るといふ表現には、女性が手の平を返したように態度が変わる意も含んでいる。「秋風の吹き裏返す葛の葉のうらみてもなほ恨めしきかな」（古今・恋五・八二三 平貞文）。○心より吹くにもあらぬ秋風に 底本は「秋風は」。他本により「秋風に」と校訂した。「秋風は自然に吹いていて特別に葉をなびかせようとしてゐる訳ではない」意に、「来て欲しいと言って招いている訳でもない（勝手にやってきた）のに」という意味を重ねている。○かへる木の葉のうらみざらなん 「かえる」は「葉が裏返る」意と「男が帰る」意の掛詞。「うらみ」は「裏見」と「恨み」の掛詞。

〔通釈〕 やって来たので、追い返したところ、またその人から

秋風になびくように、あなたにひかれて訪ねた私の心は、葛の葉が風に吹き返されるように、急に態度を変えたあなたに追い返されるのが、とても辛いことです。

返事

私の心から吹いたわけでもない秋風なのですから、追い返されるあなたも私を恨まないで欲しいものです。

一八二・一八三番歌

琴を借りて人に

年を経て音に聞きつる琴の音を手にならしつる秋ぞかなしき

返し

音にのみ聞きけることに劣ればやならしそむるに秋のそふらん

〔異同〕 きむを↓こと（前）ことを（歌）、ひとに↓ナシ（歌）、おとにき、つる↓き、ならしつる（前）、きむのねを↓ことのねを（前・歌）、かなしき↓うれしき（前・歌）、き、けることに↓き、つることの（前）、そむるか↓そむるに（前・歌）、秋の↓あはれ（前）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○琴を借りて人に 琴は中国渡来の七絃の琴。平安初期に盛んで、村上天皇のころまでは上流貴族の子女の重要な教養とされたが、平安中期には廢れる。中務が琴を借りて、その人に送った歌。○音に聞きつる 「音に聞く」は「琴の音を聞く」意と、「うわさに聞く」意を掛ける。○手にならしつる 私の手で鳴らし、馴染んだ意。「ならし」は「鳴

らし」と「馴染らし」の掛詞。「桃園の宮に琴かりきこえて、返し奉るに／聞きならすことはへにけることなれど逢はぬ恋こそかひなかりけれ」（斎宮女御・六八）。○秋ぞかなしき 「かなしき」はしみじみと心引かれる意。「陸奥はいづくはあれど塩釜の浦漕ぐ舟の綱手かなしも」（古今・東歌・一〇八八）。○聞きけること 「こと」は「琴」と「事」の掛詞。○ならしそむるに 底本は「ならしそむるか」。他本により校訂した。「ならし」は「鳴らし」と「馴染らし」の掛詞。○秋のそふらん 「秋」に「飽き」を掛ける。贈歌の謝辞に対して謙虚に答えた。

〔通釈〕 琴を借りて、その人に

長年、うわさに聞いていたあなたの琴を拝借して、私の手で鳴らし、馴染んだこの秋は、しみじみと心にひかれたことです。

返し

うわさだけに聞いていた琴の音色が、聞いていたよりも大したことがないから、鳴らしはじめ、馴染みはじめると、飽きてきているのではないのでしょうか。

〔補説〕 『伊勢集』三五〇番から三五三番には、伊勢と敦慶親王との琴をめぐる贈答歌あり、中務の両親ともに琴に秀でていることが窺えて興味深い。また、琴の名手を記載する『奏筆相承血脈』には、伊勢と敦慶親王とともに中務の名も記されており、琴に堪能であったことがわかる。

一八四・一八五番歌

方違へに人の家に行きて帰りて、つとめて、萩にあさがほの掛かりて咲きたるを、折りて彼より

初秋の萩のあさがほ朝ぼらけ別れし人の袖かと思ふ

返事

袖の色も見えやはしけむあさがほの昼は移ろふ別れならぬに

〔異同〕 人の家にいきて↓人のもとにいきたるに（前）、返りてつとめて↓ナシ（前）つとめて（歌）、はきに↓はきの（前）、あさかほの↓あさかほに（前）、かゝりてさきたるを↓かゝりてさいたるを（前）かゝれたるをおりて（歌）、はつ秋の↓夏秋の（歌）、おもふ↓みる（前）、ひるはうつろふ↓ひるうつろひし（前・歌）、わかるならぬに↓わかれなりしを（前）別ならぬに（歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○方違へ 陰陽道の説によってある行動の角を一たび違える風習。○萩にあさがほの掛かりて 朝顔と萩を同時に詠む例は、前時代では山上憶良の「萩の花尾花葛花なでしこが花をみなへしまた藤袴朝顔の花」（万葉・巻八・一五三八）のみで、同時代の和歌では他例を見出せない。後代には「おもひわく色こそなけれ朝顔の花咲かかる庭の秋萩」（江雪・一五六）などが見られる。当該贈歌は朝顔と萩を同時に詠んだ平安期としては珍しい例といえよう。○初秋 立秋から旬日という。○萩のあさがほ 萩に掛かって咲いている朝顔の花のこと。○朝ぼらけ 夜が明けはじめて、物がほのかに見える頃。○別れし人の袖 翌朝、別れて帰って行った中務を婉曲に指した表現。萩に朝顔が掛かっている姿に袖を連想させた。「こむらさき誰が袖かけし衣ぞと見ゆるは秋の野萩なりけり」（惠慶・九四）。○袖の色 贈歌が萩に朝顔が掛かっている姿を袖に見立てたので、その花の色を紅涙で染まった袖の色と喩え

た。「くらべ見む我が衣手と秋萩の花の色とはいづれまされり」（躬恒・八六）。○昼はうつろふ 朝顔が朝、美しい花を開いて、日が高くなるころには萎んでしまうこと。花が色褪せる意に、人の心が変わる意を重ねる。○別れならぬに 底本は「わかるならぬに」。このままでは意味が通じないので歌仙本によって校訂した。

〔通釈〕 方違えにある人の家に行つて帰つて、翌朝、萩に朝顔が掛かつて咲いているのを折つて、その人から

初秋の萩に掛かっている朝顔は、夜が明けた頃、お別れたあなた
の袖かと思ひました。

返事

私の涙で紅に染まった袖の色も見られてしまったのでしょうか。朝顔が昼に色褪せるように、昼に心変わりをするような、はかない別れではありませんのに。

〔補説〕 当該歌は「別れし人の袖」や「袖の色」など、恋人との袖の別れを思わせる表現を用いて恋歌の雰囲気だが、通常の挨拶の歌であるう。相手が男か女かは定かではない。

一八六番歌

「夜べの月見けんや」と人の言へるに

いつとてもあはれと思ふを寝ぬる夜の月はおぼろけなくぞ見し

〔異同〕 見けんやと↓見やしけん（歌）、人の言へるに↓人のいひたるに（前）、あはれとおもふを↓あはれとみるを（歌）、おぼろの↓おぼろけ（歌・前）

〔他出〕 師輔・五六（作者・勤子内親王）、新古今・恋歌四・一二五八、定家八代抄・一三六一

〔語釈〕 ○人「人」が誰かということとは『中務集』からは特定できない。〔補説〕参照。○いつともあはれと思ふ いつでも月をしみじみと美しいと思っているが。「いつとも月見ぬ秋はなきものをわきて今夜のめづらしきかな」（後撰・秋中・三三五 藤原雅正）。○寝ぬる夜の月 共寝した昨日の夜の月。「寝ぬる夜の月は見ると今朝はしもおきゐて待てどとふ人もなし」（和泉式部日記・八四 敦道親王）。○月はおぼろけなくぞ見し 底本「おぼろけ」では文意を解しがたいため、他本によって改めた。また、「おぼろけなく」に「泣く」の意を掛け、「泣く泣く」と続ける。「おぼろけなく」は並一通りでないさまの意。「深き夜のあはれを知るも入る月のおぼろけならぬ契りとぞ思ふ」（源氏物語・一〇二 光源氏）。「おぼろけ」に朧の意を掛ける。

〔通釈〕 「昨夜の月を見ましたか」と人が言ったので

いつでも月をしみじみと美しいと思っ
た昨夜の月は格別で、泣きながら見たので朧げに見えました。

〔補説〕 当該歌は『新古今集』に中務の歌として入集しているが、『九条右大臣集』には師輔と勤子内親王の贈答歌群の末尾の歌として収載されており、詠者は勤子内親王となっている。木船重昭氏『師輔集・清慎公集注釈』（大学堂書店・平二）は「撰者の作者認定の誤りか、あえて勤子内親王にみなしての虚構による配列か」としている。

当該歌は詠歌状況がわかりにくい。和歌では「寝ぬる夜の月はおぼろけなくぞ見し」と詠み、共寝した昨夜の月は格別であるとする一方、詞書の「夜べの月見けんや」という男の言葉からは、昨夜は一緒にいなかったかのようである。また、女が男に贈る歌にしては直接的過ぎる表

現であり、違和感がある。

一九八・一九九番歌

誰にかあらむ、また人

秋の夜の夢路と思はばいたづらに行きて帰るもうらみざらまし

返事

行き帰る道も知られぬ心にてまどひし我は誰をうらみむ

〔異同〕 ゆめちと↓ゆめそと（歌）、おもは、↓おもへは（前）、うきかへる↓ゆきかへり（歌）、みちもおくれぬ↓みちもしられぬ（歌）、みちにまどひし（前）、こ、ろにて↓こ、ろには（前）、まどひし我は↓またひとしれは（歌）まどひしわれも（前）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○また人 誰であるかは特定できない。○秋の夜の夢路と思はば 男が中務を訪れたが会うことができず、その行き帰りの道のりが秋の長夜の夢路であると思えば、の意。○道も知られぬ心 底本「道もおくれぬ心」では歌意を解しがたいため、他本によって改めた。○誰をうらみむ 男に劣らず自分も相手のせいで思い悩んでおり、男を恨もうという意と考える。あなたは私を恨んでいます、前後不覚の私は誰を恨めばよいのかすらわかりませんの意。

〔通釈〕 誰であつただろうか、また他の人が
秋の長い夜に辿る夢路であると思えば、あなたに会えずただむなく行つて帰ることも恨みはしないだろうに。

返事

行く道も帰る道もわからないような気持ちで思い悩んだ私は、一体誰を恨めばよいのかすらわかりません。

高野 晴代（日本女子大学教授）

高野瀬恵子（日本女子大学非常勤講師）

加藤 裕子（日本大学大学院博士課程後期単位取得満期退学）

森田 直美（川村学園女子大学専任講師）

斎藤由紀子（日本女子大学大学院博士課程後期単位取得満期退学）

曾和由記子（日本女子大学大学院博士課程後期在学）

谷崎たまき（日本女子大学大学院博士課程後期在学）